

海外出張報告

天然資源の開発利用に関する日米会議（UJNR） 第43回有毒微生物専門部会日米合同会議の概要

出張期間：平成20年11月3日～7日
出張場所：米国農務省 南部地域研究センター

MURATA Hideo

生産病研究チーム長 村田 英雄

第43回有毒微生物専門部会日米合同会議(以下、会議)は平成20年11月3日から7日にかけて米国ニューオーリンズ市の米国農務省(USDA)南部地域研究センター(SRRC)で開催されました。日本からは、山本茂貴部会長(国立医薬品食品衛生研究所)、小西良子副部会長(同)、五十君静信(同)、鎌田洋一(同)、長嶋等(食品総合研究所)、鈴木敏之(中央水産研究所)と村田の各部会員、加地祥文厚生労働省監視安全課長(UJNR日本側部会事務局)の8名が出席しました。米国側からは、Dr. Marleen Wekell(FDA、部会長)、Dr. Douglas Abbott(USDA)、Dr. Arthur Liang(CDC)、Dr. Chris Maragos(USDA)、Dr. Kenneth Voss(USDA)、Dr. Marianna Miliotis(FDA)とDr. Thomas Cleveland(今回のホストSRRC/USDA)の各部会員の他、SRRCやルイジアナ州立大学から約10名の参加がありました。

本会議は食品(農産物、畜産物、海産物及びそれらの加工物を含む)を汚染する微生物及びその毒素の研究に携わる日米政府(系)機関の研究者から構成されており、扱われる対象はウイルス、細菌、真菌、マイコトキシン、マリントキシンと多岐に亘ります。従って、会議も初日のビジネスミーティング、2、3日目の科学者会議、4、5日目のスタディツアーと、長丁場で盛り沢山ではありましたが、各項目は比較的時間的余裕があり、密度の濃い討議や情報交換が可能でした。

初日ビジネスミーティングはSRRC代表者からの歓迎挨拶、両国部会長の開会挨拶が行われた後、日本側山本部会長から昨年度会議(日本で開

催)の要約が報告され、文献交換や研究者訪問の活動報告が行われました。引き続き、両国双方から食品や農産物の汚染実態、食中毒発生状況の年次報告や話題提供が行われました。

第2、3日目の科学者会議では、穀物のカビ毒検査用の試料収集法に関する講演を皮切りに、細菌毒素、マリントキシン、マイコトキシンに関する15演題の発表があり、食品衛生、食糧の安全性確保に関する、双方の情報交換が行われました。3日目午後には、地元ルイジアナ州立大学のMichael Moody教授から、大学で実施している「途上国内で食品、食糧の安全を確保するための国際訓練事業」について講演がありました。

第4、5日目はSRRCの企画によるスタディツアーとして、ミシシッピ川(以下川、因にニューオーリンズはその河口の三角州に発展した街である)周辺の4ヶ所(粗糖、精製糖工場、USDAの輸出穀物検査機関(GIPSA)及びリバーエレベーター)の施設見学を行いました。川の両岸はトウモロコシ、ワタ、さとうきび等の一大農産地帯で、その運搬には川を上下する舢舨や大型船が活躍しています。また、川岸には穀物の輸出用集積所(いわゆるリバーエレベーター)が点在していて、日本の商社の持ち物もあります。幸い、そこでは2年前のハリケーン、カトリーナの影響は都市部に比べて小さかったとのことですが、この一帯は日本の食糧安保上、常に目を離せない地域であることを実感して、この有意義だった会議の全日程を無事に終了しました。